

浄土真宗・お念仏とは

第三回

人間の願いと

仏の願い

私たちの願いは、小さな子供のわがままな願いと同じではないか。それに対して、仏さまの願いは、中でも阿弥陀如来の願いは、そのような一部の人の幸せだけでなく、すべての人を平等に幸せにしたいという究極の願いだと言われます。阿弥陀如来の願いは、大無量寿経というお経に詳しく説かれています。一人の国王が、仏さまの教えを聞き、自分も、どの国よりも優れて、すべての人を、本当に幸せにできる理想の国を創りたいと思ひ立ち、その理想の国に、生まれさせるには、どうすればよいか。競争に勝った人、難しいことが出来る人、お金がある人、健康な人など、特別な人だけが、幸せになれるのならば、それは、すべての人ではなく選ばれた特別の人だけが幸せになれるので

す。この現実の世界とまったく同じであり、すべての人が等しく幸せになれるという理想の国ではありません。そこで、そうした理想の国を完成させるために、宇宙的な長い時間考え、二百一十億という仏の国々、すべてを調べ、また天文学的な長い時間修行して、すべての仏の国に越え優れた理想の国を完成された、それがお浄土であると、お釈迦さまが説かれているのです。現在、国連に加入している国は、200ヶ国以上あります。二百一十億という数は、いま地球上に現存する国の一億倍にもあたります。そのすべてを調べ、どの国よりも素晴らしい国を創りたいと、努力して、完成したと説かれているのです。すべての人が平等に幸せになるようにしたい、難しい条件を必要とせず、ただ「南無阿弥陀仏」と、お念仏一つ口にするだけで、救い取りたいというのが

阿弥陀如来の願いであり、その国がお浄土であると説かれています。四、救われるというのは南無阿弥陀仏を口にすることで、何故お浄土に生まれることができるのか。それは、人間の知識ではとても理解できません。しかし、お釈迦さまはすでに、お浄土は十劫（じっごう）という昔々に完成しており、その場所は、十億の仏の国々を過ぎたところにあると、説かれています。しかし、その国は、そんなに遠い所にあるのではなく、すぐ近くにあるとも説かれています。そのお浄土へは、命終わってから生まれることができ、生きている間は、お浄土に生まれることに決まった仲間、仏になる仲間であると、親鸞聖人は教えていただいています。ですから、救われるといっても、いまこのままで、お浄土に生まれ救われるのではないのです。お念仏の人は、命終われば

お浄土へ生まれ、喜びに満ち満ちた、仏としての働きが出来るものの、身の体をもった今は、喜びもあり苦しみもあり、痛みもかゆさも、腹立ちも怒りもどうすることも出来ない悲しさを持つているものです。しかし、その苦しき痛みもお念仏の生活をする事で、和らげられ、解決されていくのも、また事実です。私たちの先輩たちは、お念仏をする生活の中で、どのような苦しい境遇にあっても、力強く生き抜いて来られました。とても耐えることのできないような逆境でも、いきいきと、にこやかに心豊かな生活をしてこられました。科学的な思考しかできない頭で考えては、なかなか理解できませんが、お念仏の生活で、こうした予想も出来ない変化が起こるのは事実です。表1面5段目に続きます

お念仏は 懺悔であり、感謝であると聞かせていただく。住岡 和枝

ホームページは「お墓のさんわ」で検索してください。

日出店：速見郡日出町川崎会下(空港道路入口) TEL (0977) 72-6415
三重店：豊後大野市三重町赤嶺1041(トリアル横) TEL (0974) 22-3301
森町店：大分市横尾2733-1(大東中学入口) TEL (097) 524-6525



第167号 発行所 さんわグループ 編集 広報部 大分市森町

豊後二孝女の旅

(御手洗 隆明)

教学研究所周員)

『ともしび』2016年 8月号掲載)

昔、豊後国(大分県)臼杵(うすき)藩泊(とまり)村(旧大野郡川登村・現臼杵市野津町川登)の農家にツユとトキという姉妹がいた。幼い頃に母を亡くしたが、父初右衛門を支えながら成長し、親孝行な姉妹として近隣にまで知られ、姉ツユは十四歳で良縁を得た。臼杵の善正寺(本願寺派)門徒であった初右衛門は、文化元年(一八〇四)三月、法友と親鸞旧跡巡拝の旅に出た。江戸時代も後半になると、聖跡参拝などを理由に長距離の移動が可能な時代となっていた。

足に持病を抱えながら巡拝を続けた初右衛門は、常陸国(茨城県)で持病を悪化させ、水戸藩領内の青蓮寺(本願寺派・常陸太田市)住職に救われ、療養しながらその弟子となり教西と名のつた。しかし、臼杵の姉妹達との連絡は途絶えたままであった。七年後の文化八年(一八一)三月、西本願寺の親鸞聖人五五〇回忌法要に上山した善正寺住職は、偶然出会った青蓮寺住職より初右衛門の消息を知らされ、姉妹にそのことを伝えた。行方知れずの父を案じ続けていた姉妹は、同年八月十一日、周囲の反対を押し切り、三百里(約一二〇〇キロ)先の青蓮寺に向けて出立した。ツユは二十二歳、トキは十九歳であった。

若い姉妹にとつて当時の三百里の旅は命がけであり、危険を避けるために髪を切り身なりを変え、路銀も持たなかった。身に迫る恐怖には念仏を称えることで耐えるしかなかったが、旅先で出会った人々の支援などの幸運を宗祖聖人の導きと受けとめ、昔(すげ)の旅笠に臼杵の真宗巡拝者であることを記して旅を続けた。臼杵から海路大坂へ向かった姉妹は、九月に京都で上山を遂げた後、東海道を進み月末には箱根の関所を通り、江戸に至った。そこでも幸運に臼杵藩士の保護を受け、十月九日、ついに常陸国の青蓮寺にたどり着き、闘病中の父との再会を果たした。臼杵出立から約二ヶ月の旅であった。その後、姉妹は地元の人々

の支援を受けながら父の回復を待ち、翌年二月九日に親子で青蓮寺を出立し、四月六日に故郷へ戻った。臼杵藩主は姉妹を称賛し、土地三石を無税で与えた。身命をかえりみず三百里の旅を遂げ、無事父を連れ戻した姉妹の逸話は、やがて「豊後二孝女」の伝説となり、茨城県では高校道徳の教科書で紹介され、大分の臼杵市川登小学校は「二孝女の碑を仰ぎつつ友愛信義勉学の」と校歌に唄った。二〇〇五年、青蓮寺で姉妹についての古書簡十七通が発見され、二孝女伝説は史実と判明し、常陸太田市と臼杵市双方で姉妹顕彰の気運が高まり、記念碑建立や両市民による「二孝女顕彰会」設立などの交流が始まり、二〇一五年十月に両市は姉妹都市となった。姉妹の願いが成就したのは、臼杵・水戸両藩や各地の役人の理解など数々の幸運が

あったとはいえ、御旧跡巡拝などによって地域を越えて生まれた真宗門徒間のつながりなくしてはありえなかった。文化十年(一八一三)以降に始まり、やがて西日本各地にも広がった「真宗移民」の歴史も、この動きのなかにある。(参考) 豊後国の二孝女研究会『豊後国の二孝女』(青蓮寺、二〇〇六年)、橋本留美『実話病父を訪ねて三百里』(新日本文芸協会、二〇一〇年) 裏からの続きです 多くのお念仏の人は、この世で、人間であることの苦しき乗り越えて生きて行くことが出来たのです。お念仏の生活は、人びとに大きな変化をもたらしたのです。 第3回 終

